

桂離宮

Katsura Imperial Villa



■桂離宮の歴史

桂離宮は、後醍醐天皇の弟・八条宮初代智仁親王により、宮家の別荘として創建されたものである。幼少の頃より文武百戦に秀でておられた親王は、17世紀初頭にこの地を得られて後、元和元年（西暦1615年）頃に山荘の造営を起こされ、数年ほどの間に簡素のなかにも格調を保った桂山荘を完成されている。親王の10歳台前半の時期にあたり、古書院が建てられたものとみられる。親王が没せられて後10年余の間は山荘も荒廃期であったが、二代智忠親王は加賀藩主前田利常の息女富姫と結婚されて財政的な裏付けもでき、山荘の復興、増築などに意欲的に取り組まれた。智忠親王は父君智仁親王譲りの研ぎすまされた美的感覚をもって、寛文2年（1662年）頃までに在来の建物や庭園に巧みに調和させた中書院、さらに新御殿、月波楼、松琴亭、賞花亭、芙蓉軒等を新增築された。池や庭園にも手を加え、ほぼ今日に見るような山荘の姿に整えられた。特に桂欄及び付書院で知られる新御殿や御幸道などは、長水尾上息を桂山荘にお迎えするに当たって新改造されたものと伝えられている。八条宮家はその後、常野井宮、京極宮、桂宮と改称されて明治に至り、明治14年（1881年）十二代継子内親王が亡くなられるとともに絶えた。宮家の別荘として維持され

てきた桂山荘は、明治16年（1883年）宮内省所管となり、桂離宮と称されることとなるが、創建以来永きにわたり火災に遭うこともなく、ほとんど完全に創建当時の姿を今日に伝えている。昭和39年（1964年）に農地7千㎡を買い上げ景観保持の備えにも万全を期している。

■概説

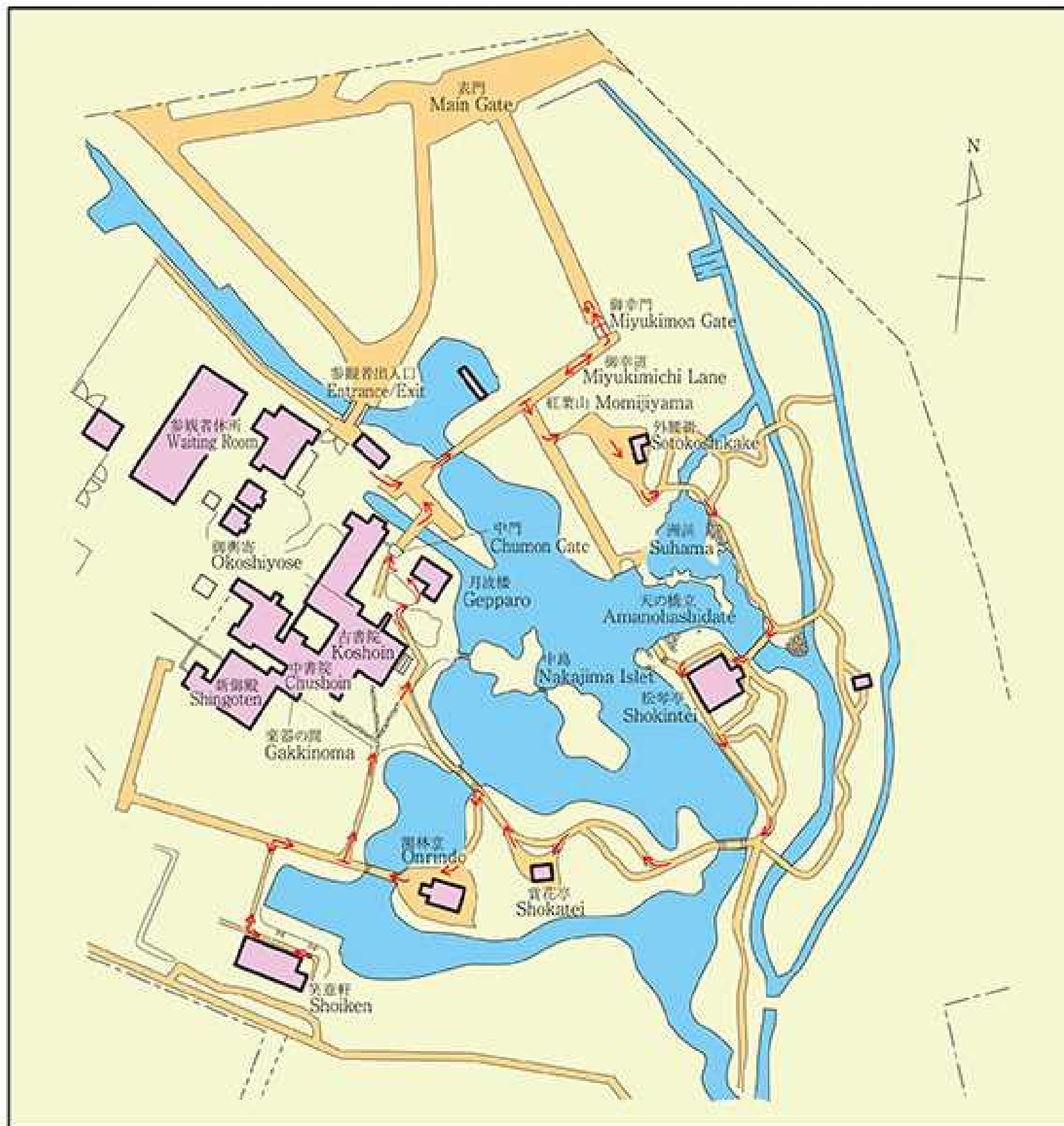
桂離宮の総面積は付属地も含め約6万9千㎡余りである。中央には親離に入り組む汀線をもつ池があり、大小五つの中島に土橋、板橋、石橋を渡し、書院や茶室に寄せて舟着きを構え、灯籠や手水鉢を要所に配した河瀬式庭園と数寄屋風の純日本風建築物とで構成されている。苑路を進むと池は全く姿を消したり、眼前に洋々と広がったり、知らぬ間に高みにあったり、水辺にあったりしてその変化に驚かされる。また切石と自然石を巧みに利用し、それにより真行、草にもたとえられる延段や、あるいは飛石の変化を楽しむことができ、入江や洲浜、築山、山奥等もあり、それぞれが洗練された美意識で貫かれ、晴雨にかかわらず四季折々に映し出される自然の美には感嘆尽きることを知らない。作庭に当たり小堀遠州は直接関与していないとする説が有力であるが、庭園、建築ともに遠州好みの技法が随所に認められることから、桂離宮は遠州の影響を受けた工匠、造園師らの技と智仁親王及び智忠親王の趣味趣向が高い次元で一致して結実した成果であろう。

京都御所、京都大宮御所、京都仙洞御所、修学院離宮とともに皇室用財産（国有財産）として宮内庁が管理している。

このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



■桂離宮 略図



このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



発行 公益財団法人 關西文化協会
写真・資料提供 宮内庁